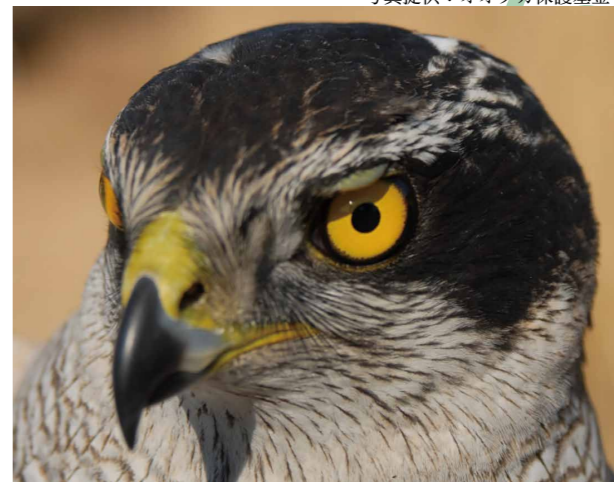


準絶滅危惧

オオタカが棲む

森を守る

生乳生産本州一の那須塩原市。本市ならではの牧草地とアカマツ林が織りなす環境は、オオタカにとって絶好の生息地だ。なんとその生息密度は世界有数。しかし、その恵まれた環境は単に天から与えられたものではない。その後ろには、それを守ろうとする人々の長年にわたる努力がある。



▲ハイタカ属では世界最大であり、タカ類でも代表的な種。

◀オスは全長50cmほどでオスの頭頂部から体上面が暗青灰色。メスは全長57cmほどで褐色味がある。

▶古来は鷹狩によく使われた奈良時代から「蒼鷹(あをたか)」の名で知られ、平安時代にそれが転じて「おほたか」と呼ばれるようになった。

◀オオタカは、山地の森林から都市の緑地まで広く生息する。なかでも平地から丘陵地の、森林と開放地がモザイク状に存在する地域が主な生息場所となっている。



1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
	求愛・巣作り		産卵	ふ化	巣立ち		独立	



巣の多くはアカマツ林に

地上から12mほどの高さの大きく枝分かれしたところに巣を作ることが多い。数年にわたって同じ巣を利用する場合と、毎年新しく巣を作る場合がある。巣は直径1m、厚さ25cm程度であるが、何年も利用されるとその都度巣材の枝を積み上げるため100cmを超えることもある。



ふ化した直後は白い羽毛

産卵のピークは4月中旬頃で、1羽が1回に産む卵数は通常3~4個ほどである。メスが卵を抱き、オスは狩りをして餌を運ぶ。産卵から40日ほどでふ化し、ヒナはひよこくらいの大きさで、全身は白色の羽毛に覆われている。写真はふ化後2週間のヒナで、頸はしっかりとしているが、脚力は十分でない。



成長につれ褐色の姿に

ふ化後4週間ほど経つと褐色の幼羽が増え、巣上で羽ばたきなども行うようになる。ふ化から40日ほどで巣立ちし、那須塩原では6月中旬~7月上旬頃。巣立ちの時点では、羽毛の成長が完了していないため、十分には飛ぶことができず、しばらくは営巣木の近くにとどまっている。



家の近くや公園の林などの身近な場所にもオオタカは生息しています。ちょうど今の季節は子育ての真っ最中。親鳥たちはとても神経質になっています。見かけても決して近づかず、遠くから見守ってあげてください。那須塩原の自然は私たちだけのものではありません。私たちが少し工夫や配慮をすることで、希少な野生の生き物たちと長く共存していくことができます。

自然との共存に向けて
その後、バブル経済による開発の波が、オオタカの棲む森を襲いました。この地域でもゴルフ場の整備が計画され、ちょうど営巣木がある林がコースになろうとしていました。オオタカが巣を作り、雛が巣立つまでに生活するエリアは30ヘクタールほど。コースを少しずつ、営巣木周辺にまとまった林を残すことで、オオタカへの影響を低減できます。さまざまな開発が計画されるたびに、調整をすることで、オオタカが繁殖できる環境を維持できるのです。

オオタカとの共存を目指して——



遠藤 孝一氏
オオタカ保護基金代表
市動植物調査研究会鳥類部会長



オオタカには恰好の住処

オオタカの繁殖には、巣を作る林と餌を確保する場所が必要です。直径1mにもなるオオタカの巣は重くなるため、それを支える枝が太くて頑丈な木が営巣の条件となります。また、オオタカが自由に飛び回れる空間も十分に残されている必要があります。込み入った森よりも、林内空間のある林のほうが適しています。那須塩原のアカマツ林は、巣を作るには適した環境と言えるでしょう。

オオタカの餌はハトやムクドリなどの野鳥です。これらの鳥はデントコーンなどの飼料が刈り残された牧草地に群がります。酪農が盛んなため、牧草地が豊富に存在するこのまちは、オオタカの格好の生息地となっているのです。

保全のための活動

昔は鷹狩などに用いられてきましたが、現在は法律で飼育が禁止されている日本のオオタカ。しかし、70年代の

右 密猟者から卵やヒナを守るために、監視巡回に加えてバリケードを設置するなどの対策を講じている。
左 オオタカが棲む森林を将来にわたり残すため、アカマツの植樹も行っている。

